

# 外国人児童生徒の学習参加を支える 日本語能力

齋藤ひろみ

東京学芸大学海外子女教育センター助教授

## 外国人児童生徒教育の課題

日本語教育や外国人児童生徒教育関連の研修会で話をさせていただく機会が多いが、殆どの研究会で「日本語の不十分な子ども達に教科内容を教えるにはどうすればいいか？」が話題となる。

Cummins は子ども達の第二言語能力を生活言語能力と学習言語能力という二つの側面で捉えるモデルを提起している<sup>1)</sup>。生活言語能力とは日常の生活場面で会話ができる力であり、学習言語能力は認知的学力的側面に結びついた言語の力である。この言語能力の捉え方は、教科学習が困難な子ども達について、「生活言語能力は身に付いたが学習言語能力はまだ身に付いていない」という説明を可能にし、「外国人児童生徒の教科学習」の問題を解決する糸口となる。

## 学習言語能力＝学習言語（用語）？

この能力の捉え方はあくまでも理論的

な枠組みであって、個々の語彙や文型、文法項目にラベルを貼って選り分けるような類のものではない。しかしながら、教育現場にこのモデルが広まっていく過程で、「学習言語能力＝学習言語＝各教科の用語や類出する文型」と、言語形式についての知識・技能へと矮小化されたきらいがある。確かに、算数の「相似、合同」等の用語や、歴史の教科書によく見られる「受け身の表現」等を学習することは、子ども達のその語彙や文型の理解を助けることは間違いないであろう。だが、「教室での教科学習」という文脈から語彙や文型のみを抜き出し、その意味を理解させたり発話練習をさせたりしても、教科学習が可能になるとは考えにくい。全体の構造やコンセプトを考えずに部品のみを造っているようなものだからである。それらの部品を全体のどこに、どのように利用するのが解らなければ、せっかく造っても役に立たない。

「教室での教科学習」という文脈から語彙や文型を抜き出して指導する方法には、このような落とし穴がある。

### 学校文脈に埋め込まれた言語能力

ここで、再度「学習言語能力」とはどのような言語能力なのかについて考えてみたい。Cummins (2000)<sup>29</sup> は言語能力について次のように述べている。

「言語能力と認知的機能は、それを利用する特定の文脈に関連づけてこそ概念化できるのであり、内容から切り離されたものや文脈から切り離されたものではあり得ない。」 pp.66

言語は常に社会的文化的に状況化された中で使用されており、言語能力や認知の働きは、埋め込まれた文脈とそこで展開される特定の内容から切り離して考えることはできないということである。学習言語能力について見れば、学校という社会的文化的文脈に埋め込まれたものとして語られてこそ意味を成すということになろう。では、学校という文脈に埋め込まれた言語能力とはどのような言語能力なのであろうか。

「学習言語能力は決して一般的な意味での言語使用に熟達することではなく、その子が教育の場で使われる、または学習課題を完成するために求められる特定

の言語を理解し、利用する体験をどれだけしたか、そして、それにどれだけ習熟しているかということである。」 (pp.66)

「教室での学習」という文脈を伴わない一般的な日本語の知識・技能の獲得は学習言語能力にはならないという指摘である。また、教科に関わる語彙や文型のみを抜き出して理解・記憶するだけでも不十分であり、実際に教科等の学習活動に参加し、そこで使われているそれらの語彙や表現を理解・運用する経験を重ねることによってこそ学習言語能力は高まると言えよう。

### 「日本語と教科の統合学習」

以上の言語能力の理論を背景に開発実践されている内容重視のアプローチによる「日本語と教科の統合学習」について簡単に紹介する。内容重視のアプローチとは、言語と他の教科等のカリキュラムを交流させ、言語の学習と内容の学習を同時に成立させようという言語教育の方法論である。それを年少者日本語教育に応用した形の一つが「日本語と教科の統合学習」である。教科内容を学ぶことにより知的好奇心が刺激され、子ども達の自発的な発話欲求によるやりとり、つまり相互作用が生じる。この相互作用を通して日本語が理解され、教科内容の学習

が行われる。同時に教科学習に参加するために必要な日本語のコミュニケーション力が身につくと考えられている。

### 「日本語と教科の統合学習」における子ども達の学習の様子

「日本語と教科の統合学習」の授業の様子（ビデオの文字化資料）から、日本語が不十分な子ども達が日本語を媒介にしてどのように内容の学習を行っているかを見てみよう。紹介するのは、中国帰国者定着促進センター<sup>3)</sup>の子どもクラスの授業「りんごとみかんの産地」の会話である。

<会話> 母国のりんごの産地についての話し合いの場面

T: 内モンゴルにりんごがありますか。

S1: あります。

S2: えーっ！ありません。

S1: あります！！！！

S2: 内モンゴル…産地…いいえっ！

T: じゃあ、ハルビンにりんごがありますか。

S: あります。

S1: えーっ？内モンゴル、ハルビン同じ、どうして内モンゴルありません？

T: 教師 S: 児童 (複数)

S1~S2: 児童 (個人)

会話前半、S1の発話に対して、S2が

「内モンゴルでも、りんごが流通しているかもしれないが、生産しているのではない」ということを、「産地、いいえっ！」と発話している。確かに、文法的に不正確で拙い発話であるが、学習したての語彙「産地」を意味の上では適切に使い、自分が知っている情報を伝えるという機能を十分に果たしている。

後半、S1は「内モンゴルとハルビン同じ！どうして内モンゴルありません？」と自身の考えを再度主張している。日本語としては不十分であるが、「緯度が同じなのに、どうして一方はりんごの産地で、もう一方はりんごの産地ではないのか。」という発話意図は伝わってくる。また、このやりとりを通して、S1が来日前に学んだ「果物の産地と気候との関係、気候と緯度との関係についての知識」が活性化されたと考えられる（これに続くやり取りの内容から判断）。日本語を媒介にした相互作用によって、既有知識、つまりスキーマが活性化されたと見えよう。

この後この授業では、日本のりんご産地を調べて日本地図で場所を確認し、分布の特徴を探るといった活動が行われ、日本のりんご産地の分布と気候との関係を知るという話題がほぼ達成された。

## 日本語を媒介とする相互作用を通じた学び

「日本語と教科の統合学習」の授業での子どもの学習参加の様子から、学習内容を巡って積極的に相互作用を行っていたこと、その中で新しい日本語の表現が利用されていたこと、また、スキーマが活性化されていたことがわかる。子ども達は互いがリソースとなり、相手の発話を誘発し、相手にとって新しい情報や考え方、感じ方、思いを伝え合っていたと言える。日本語による相互作用がスキーマの活性化、新しい内容の学習、スキーマの再編成を促進した、つまり学習を生成したと考えられる。こうした学びを成立させる上で必要な言語能力が学習言語能力であり、「日本語を媒介とする相互作用を通して学ぶ力」と言い換えてもよいのではないだろうか。

## 教師の役割

さて、語彙や文法を教える授業とは異なる内容重視型の授業では、日本語教師は一体どのような役割を担うのであろうか。上記の授業で、教師は児童の日本語能力と認知的な力に配慮し、活性化されたスキーマや新たに学習された内容に対応する日本語を選択して示す。また、理解（聞く・読む）を助けるために、絵、地図、資料等の具体、半具体物を準備

し、操作・作業等の体験的な活動をベースに授業を組み立てる。産出（話す・書く）を助けるために有用な語彙や表現を提供するという支援を行っていた。教師には、内容についての学習が展開される中で、その文脈に埋め込まれた形で日本語が理解・使用されるのを側面から支えることが求められるのである。

## 総合的な日本語能力の育成に向けて

学習言語能力とは何かについて改めて考えてきたが、生活上必要な挨拶の表現やサバイバルのための日本語表現の学習、また、文字や文法等の日本語の基礎的知識・技能の学習が必要であることは言うまでもない。どの日本語指導方法が最適かを議論することではなく、外国人児童生徒にとって必要な日本語能力を、「社会生活・学校生活・学習」を支える総合的な力として位置付け、子ども達のニーズに応じて重層的に日本語教育プログラムを組んでいくことが重要なのである。また、日本語教育の役割を、社会参加のための言語能力を高めることであると定義するならば、子ども達が母国で、或いは母語で培ってきた力を持続的に発達させていくために、母語による支援をも念頭に置くべきであろう。そして、子ども達の学習の連続性を保障し、これま

でに育んできた力を全人格的に伸長する場として、学校や地域の学習支援のネットワークが重層的に広がっていくことに期待する。

1) Cummins, J. (1986) Education in Bilingualism. Longman

生活言語能力は basic interpersonal communicative skill, 学習言語能力は cognitive academic language proficiency の訳である。

2) Cummins, J. (2000) Language, Power

and Pedagogy. Multilingual Matters Ltd.

3) 埼玉県所沢市にある、中国及びサハリンからの帰国者の一次研修機関である。子ども達は小学校低学年、中高学年、中学生に分かれ研修を受けている。紹介した会話は、小学校中高学年クラスの社会科の授業での会話である。

(さいとうひろみ 日本語教育)

